

あしあと おおまつ  
弁慶の足跡の池と大松



笛の名人牛若丸は、鞍馬山の深い森の中で天狗に武芸や兵法などを教えてもらいました。

ある日、都の人々が物騒なうわさに恐れていることを聞いた牛若丸は、「夜ごと世間をさわがす悪いくせものは許せん」と、五條の橋で大なぎなたを持って立ちほだかった大の男の弁慶を、まかしてしまいました。鬼の弁慶はあやまって家来になりました。牛若丸は時に十六才、弁慶と別れ、九郎義経と名のり、おこる平家を恐れ奥州へくだるこ

とにしました。

弁慶もすっかり心を入れ替え、よいお坊さんになりましたが、「源氏のためにつくしたい」と、かたい決意で武芸の立派な義経をしたい、都を後にしたのです。松の木の幹を杖にして、ひたすら義経にめぐりあえることを道々の神社にお参りしながらの旅でした。日光の男体山を目標に歩き、須影の八幡様のところまで来ると、はるかに日光の連山を眺め「おお、若君のおわす奥州も近こうなった」とどっかと立ち止まり、思いはせる気持ちをおさえて、おもむろに八幡宮の神前に、大事な杖を供えさし、「南無や八幡大菩薩様……」と祈願しました。

弁慶がさした松の杖は、その後、日に日に芽を吹き、たくましく根を張り、立派な社殿にふさわしい大松になったと伝えられており現在、市の天然記念物に指定されています。また、弁慶が立ち止まって出来た大きな足跡は池になって、弁慶の足跡の池といって大事に語りつがれましたが、近年、道路の拡幅でなくなっていました。その近辺には弁慶の「足跡田」といわれる田圃もあります。

●鞍馬山：京都市北部の山

●奥州：今の福島・宮城・岩手・青森の四県に当る